

旧蔵国書からみる萩藩校明倫館教育の特徴

牛見真博

一、はじめに

享保四年（一七一九）に創設された明倫館が所蔵していた書籍について、その蔵書目録は次の五種が存在する。成立順に並べれば次のようである。

- ① 『明倫館御書目録』 文政八年（一八二五）頃
- ② 『明倫館書庫目録』 天保十一年（一八四〇）頃
- ③ 『長門国萩明倫館書庫目録』 嘉永三年（一八五〇）頃
- ④ 『明倫館御蔵書目録根帳写』 嘉永五年（一八五二）以後
- ⑤ 『明倫館御書物目録』 安政七年（一八六〇）以前

なお、明倫館旧蔵書については、とくに国書の収蔵状況を一瞥できるものとして、『明倫館国書分類目録』がある^①。同目録は、明倫館が所蔵していた国書（散逸書を含む）について、書名、巻数、撰者、出版事項が記されている。さらに「初載目録」の欄が設けられており、さきの①～⑤の目録のいずれに初載されているかが分かる。これにより、明倫館旧蔵国書の全容が把握できるとともに、増加していく書籍の収蔵過程が追跡できる。

従来、蔵書のありようから藩校明倫館の教育を考察した研究は、管見の及ぶ限り見当たらない。そこで本稿では、この『明倫館国書分類目録』に拠りながら、藩校教育の実質的な学問内容を反映する蔵書という観点から、創設期から移転拡充が行われる重建明倫館以前に収蔵された国書に焦点をあてて、その間における明倫館教育の特徴について明らかにしていきたい。

二、明倫館創設と書籍の収集

明倫館創設期に書籍の収集を主導したのは、山県周南（一六八七～一七五二）であった。周南が藩から資銀十貫目を支給され、江戸で書籍の購入に当たったことや、当職の浦元敏が銀二十貫目を書籍費として提供していることなどが指摘されている^②。また、服部南郭の「周南先生墓碑」^③には次のようにある。

歴仕泰桓公觀光公、間年西東、蓋多歲矣。寵待益隆。先是先侯命創建頓宮、使国人子弟遊處、設師導、廩諸生、積菜養老之礼以時。大聚羣書、且六芸武技、諸当教習者、悉備其中。事皆稽古據式、

雜以今制、乃既巍然中国而成。名曰明倫館。

(泰桓公〈毛利吉元〉、觀光公〈毛利宗広〉)に歴仕し、間年西東すること蓋し多歳なり。寵待益々隆んなり。是より先、先侯命じて頼宮を創建し、国人の子弟をして遊処せしめ、師導を設け、諸生を廩し、積菜養老の礼、時を以てす。大いに羣書を聚め、且つ六芸武技、諸々の当に教習すべき者、悉く其中に備はる。事皆古を稽へ、式に據り、雜はるに今の制を以てし、乃ち既に中国に巍然として成る。名づけて明倫館と曰ふ。

さらに滝鶴台の「周南先生行状」⁽⁴⁾にも、

四年遂命儒臣佐源六及先考、審議学宮制。乃據延喜式、考中華歴朝制、参以東都学式、新初頼宮、興積菜養老之礼。及学成、命曰明倫館。集師儒、廩諸生、大聚典籍。(四年遂に儒臣佐源六〈佐々木源六〉及び先考〈山県周南〉に命じて、学宮の制を審議せしむ。乃ち延喜式に據り、中華歴朝の制を考へ、東都の学式を以て新たに頼宮を初め、積菜養老の礼を興す。学成るに及び、命じて明倫館と曰ふ。師儒を集め、諸生を廩し、大いに典籍を聚む。)

と見える。これらの記述からは、周南が明倫館開校にあたって実務を担当するとともに、その一環として「大いに羣書(典籍)を聚む」ことに尽力したことが窺える。また、徂徠は『政談』⁽⁵⁾において、明倫館における年間の運営費について次のように記している。

松平民部大輔、萩二学校ノ様ナル事ヲ立テ、積菜ヲモナシ、扶持方等ノ料ニ五百石附置キ、毎年書籍ヲ求ル料ニ又五百石、合セテ

千石程ノ事ニテ家来ニ学文ヲサスル故、今ハ彼ノ家中ニ学者多ク出来タリ。

つまり、年間の運営費と書籍費とは同額であり、あわせて約千石が計上されていた。『政談』におけるこの記述は、それほど蔵書の収集に力を注いでいたことを示す傍証と考えられる。

その際、収集する書籍の選別に、周南の教育思想が反映されたことは推察するに難くない。そのため、周南による書籍の収集傾向は、同時に創設期からの明倫館教育の特徴を映し出しているものと考えられる。以下、旧蔵国書からその特徴的な収集傾向について考察していく。

三、国書の収集傾向

創設期から重建以前の明倫館における国書の収集傾向を把握するため、その間の時間的な隔たりがほぼ重なる『明倫館御書目録』所載の国書を対象として、A「随叢」、B「漢文」、C「詩文」、D「音楽」、E「歴史」の領域にわたって、煩を厭わずそれらの書籍を列挙する。そして、そこから窺える明倫館教育の特徴について検討していきたい。その際、朱子学や徂徠学といった学派の観点から⁽⁶⁾、次のように著者及び書籍名を掲げることとする。

×朱子学

◎荻生徂徠

○徂徠門下及び影響関係

●反朱子学

A、隨叢

〈雜筆〉

『本朝俗談正誤』

×安積覺編『舜水朱子談綺』〔三卷〕

×藤井臧『閑齋筆記』〔三卷〕

×室直清『駿台雜話』〔五卷〕(寛延三)

◎荻生徂徠『護園隨筆』〔五卷〕(正徳四)『談余』『南留別志』〔五卷〕

『可成談』

○太宰春台『紫芝園漫筆』〔八卷〕

×菅茶山『筆のすさみ』〔四卷〕

○服部元喬『大東世語』〔五卷〕

B、漢文

×山崎闇齋『經名考』『闢異』『刑經』

●熊沢蕃山『集義和書』〔一六卷〕『集義外書』〔一六卷〕

×大高芝山『適從録』〔二卷〕(元禄一〇)

真野時繩『本朝学源浪華鈔』

×浅見頼斎『氏族弁証』

●伊藤仁斎『童子問』〔三卷〕(宝永四)

●伊藤東涯『天命或問』『古今学変』〔三卷〕(享保三頃)『復性弁』

『經学文衡』〔三卷〕(享保一九)『釈親考』

◎荻生徂徠『弁道』五組『弁道集註』『弁名』〔二卷・五組〕(享保

二)『弁名集註』『学則』二組(享保一一)『学則集註』『徂徠先生答問書』〔三卷〕(享保一〇)

×專庵信敬『徂徠学則弁』(宝曆二)

○三浦衛興『徂徠先生学則解』二組(延享元)

○服部南郭『南郭先生燈下書』(享保一九)

○太宰春台『聖学問答』〔二卷〕(享保二二)『親族正名』(享保一〇)

『斥非』二組『六經略説』(延享二)『弁道書』(享保二〇)

○本多忠統『猗蘭子』〔三卷〕

●原田直『經説拾遺』〔二卷〕(延享五)

冢田大峰『聖道弁物』〔二卷〕(寛政八)『聖道合語』〔二卷〕(天明

八)『聖道得門』(寛政四)

陰山元質『田録凶經』〔三卷〕(元禄一三)

窪井惟忠『古訓集要』〔三卷〕

C、詩文

〈詩文評・作詩作文〉

◎荻生徂徠『古文矩』(明和元)『文変』『訳文筌蹄』〔初編六卷〕『訳

文筌蹄後編』

◎荻生徂徠編『四家雋』〔六卷・四組〕(宝曆一一)

○太宰春台『文論』(寬延元)『詩論』(寬延元)

○山県周南『作文初問』(宝曆五)

○藤元鳳『芸苑錄』(二卷)(明和八)

●伊藤東涯『用字格』(三卷)(元禄一六)『助字考』(二卷)(元禄六)

○林義端『文林良材』

『清百家絶句集』

『尺牘活套』

×藤原惺窩『文章達德録』(六卷)(慶長四)

〈総集〉

『本朝詩英』

藤原明衡『本朝文粹』(八卷)

○林義端『扶桑名賢文集』(五卷)

×新井白石『停雲集』(二卷)(享保三)

○宇佐美恵『護園録稿』(二卷)(享保一一)

○福田元秀編『護園名公四叙』(享保一一)

○山県魯彦『瀾城新著』(寬延二)

西島蘭溪『題画詩類絶句抄』(二卷)

『和韓唱酬集』(天和三)

『両東唱和』(二卷)(正徳元)

○『雞林唱和集』(正徳二)

○『桑韓唱和損篋集』(二〇卷)(享保四年)

○『桑韓唱酬集』(享保四)

○『両関唱和集』(享保五)

『和漢筆談薰風編』(寬文元)

○『長門戊辰問槎』(寬延元)

『和韓唱和録』(延享四)

〈別集〉

菅原道真『菅家文章』

×藤原惺窩『惺窩文集』(二二卷)(慶安四)

×林信勝『羅山文集』(七五卷)(寬文二)

×林恕『鷲峯文集』(二二〇卷)(元禄二)『本朝稽古篇』

●伊藤仁斎『古学先生集』(六卷)(享保二)

●伊藤東涯『紹述先生文集』(三〇卷)(宝曆八一一)

×貝原益軒『自娛集』(七卷)

○安藤東野『東野遺稿』(三卷)(寬延二)

×新井白石『白石集』(正徳五)

◎荻生徂徠『徂徠集』(三〇卷)

○『徂徠集集註』

○平野金華『金華集』(享保一六)

×室鳩巢『鳩巢集』(宝曆一一一一三)『補遺鳩巢集』

田中逸『樵漁余適』(二五卷)(寬保元)

○太宰春台『春台文集』(宝曆二)

×梁田邦美『蛻巖集』〔八卷〕(寛保元)

×祇園瑜『南海一夜百首』(宝曆一一)

○山県周南『周南文集』〔二〇卷〕(宝曆一〇)

○滝鶴台『鶴台集』〔一〇卷〕(安永七)

○片山鳳翮『鳳翮集』〔二二卷〕(文化八)

○本多忠統『猗蘭台集』(享保一七)

○服部南郭『南郭集』〔二〇卷〕(享保一一—宝曆八)

○秋山玉山『玉山集』〔六卷〕(宝曆四)

○山根南溟『南溟集』〔三卷〕(寛政九)

○和智東郊『東郊集』〔五卷〕

○服部元雄『踏海集』〔八卷〕(明和六)

○山根華陽『華陽集』〔二〇卷〕(明和七)『濟州集』〔二卷〕

○田坂瀨山『瀨山集』〔六卷〕(明和二)

○山田時文『北海集』〔六卷〕(文化五)

○佐々木俊信『龍原集』〔五卷〕(文化元)

○細井平洲『嚶鳴館遺稿』〔二〇卷〕(文化四)『嚶鳴館集』〔六卷〕(宝曆一二)

×伊藤坦庵『坦庵集』〔二三卷〕

田中良暢『蘭陵集』(寛保二)

釈空海『性靈集』

釈周興『半陶稿』

大潮元皓『魯寮文集』〔二卷〕(延享二)

『明月篇』

内藤昌盈『官暇漫吟』〔二卷〕

随叢・漢文・詩文の領域に関する集書の特徴

『御書目録』の編纂は、明倫館創設から約百年間の隔たりがあるため、この点も勘案して上記の旧蔵国書について分析する必要がある。そこで、創設された享保四年(一七一九)以降、『御書目録』が編纂された文政八年(一八二五)にかけて、約百年間の明倫館について学頭とその在職期間を示すと次のようである。

- 初代 小倉尚斎(一七一九—一七三七) 朱子学
 - 二代 山県周南(一七三七—一七四八) 徂徠学
 - 三代 津田東陽(一七四八—一七五四) 徂徠学
 - 四代 山根華陽(一七五九—一七六二) 徂徠学
 - 五代 小倉鹿門(一七六二—一七七五) 徂徠学
 - 六代 繁沢豊城(一七七五—一八〇六) 徂徠学
- ※山根南溟(一七七五—一七九二)の間は、繁沢豊城と兼任
- 七代 小田村藍田(一八〇六—一八一二) 徂徠学
 - 八代 中村華嶽(一八一二—一八三五) 徂徠学

朱子学を標榜して開校した明倫館は、初代学頭の小倉尚斎こそ朱子

学派であったが、二代学頭の周南以降は、その弟子たちに一貫して徠学が重んじられていたことが分かる。この傾向は九代学頭の山県太華が、明倫館教学を再び朱子学に転換するまで続く。それを踏まえた上で、創設期から収集された国書について、大局的に学派別の割合を見ると次のようである。

Aの「随叢」〈雑筆〉では徠学の著作が三六パーセント、徠学門下の著作を含めると五四パーセントとなる。またBの「漢文」領域においても、徠学三四パーセント、徠学関係をあわせると五七パーセント、さらにそれらを含む反朱子学という枠で考えると、じつに八〇パーセントを占めている。同じくCの「詩文」領域についても、〈詩文評・作詩作文〉において、徠学のものだけで四四パーセント、徠学関係をあわせて七二パーセントとなる。〈別集〉では、徠学関係で五〇パーセントを占め、朱子学派のものは、わずか九パーセントにとどまっている。

また、享保年間（一七一六―一七三六）以降、徠学に対する批判の書も多くあらわれるようになるが、明倫館においてそれらの書物はほとんど収集されることはなかった。主な書を列挙すると次のようである。

- 谷口大雅 『徠学則問答』
- 高瀬学山 『非聖学問答』
- 上月専庵 『徠学則弁』
- 石川麟洲 『弁道解蔽』

松宮観山 『学論』 『学論二篇』 『学脈弁解』

井上金峨 『読学則』 『弁徴録』

森大年 『非弁道』 『非弁名』

深谷公幹 『駁斥非』

蟹養斎 『非徠学』 『弁復古』

服部蘇門 『然犀録』

高志泉溟 『時学鍼焮』

唐崎広陵 『弁道断論』 『物学弁証』

五井蘭洲 『非物篇』 『質疑篇』

中井竹山 『非徴』 『閑距余筆』 『建学私議』

片山兼山 『斥非弁名』 『斥非弁道』 『斥非学則』 『弁護園学』 『論語微廢疾』 『論語微膏肓』 『大学解廢疾』 『中庸解廢疾』 『山

子垂統』

細井平洲 『道説』

尾藤二洲 『正学指掌』 『素餐録』

藪孤山 『崇孟』

古屋昔陽 『古今学変考』

平 瑜 『非物子』

亀井昭陽 『読弁道』

大田錦城 『悟窓漫筆』

石川香山 『読書正誤』

大橋訥庵 『正学卮言』 『正学侮禦』

このうち明倫館蔵書に見られるのは、上月専庵の『徂徠学則弁』のみである。このように反徂徠学とも言うべき書物については、ほとんど収集の対象から外されていることが分かる。

詩文の領域

林家をはじめとする朱子学派に詩文集がないわけではないが、詩文に関わる意識という点で、徂徠学とは大きく異なる。ここでは、徂徠学の詩文に対する態度が端的にあらわれている幾つかの資料を掲げ、両学派の相違について見ていきたい。

たとえば、徂徠の『政談』には次のようにある。

詩ナドハ無益ノ筋ノ様ニ理学者ノ申ニ依テ、白人ハ実ト思フベケ

レドモ、文字ヲ取廻ハサネバ詩ハ作ラレヌ物也。文字ヲ取廻セバ、

自ラ経書モ歴史モ見ル事故ニ、日本古、四道ノ儒者ヲ立ルニモ、

詩文章ノ学問ヲ経学ヨリハ上ニ置タル事也。

「理学者」とは朱子学派を指すが、彼らが「詩」を「無益」と捉えていることに対して、徂徠は反駁する。徂徠にとって、詩とは単なる感情の発露ではなく、詩作により「文字」を「取廻」すことで、それが経書や歴史にも通じる階梯であることを述べるのである。それは文字の中にこそ、学問があるという信念でもあつたように思われる。

『徂徠先生答問書』^⑧においても、詩文無益論に対して次のように述べている。

詩文章之学は無益なる儀の様ニ被思召候由。宋儒の詞章記誦などと申候を御聞入候事年久敷候故。左様思召候にて可有御座候。まづ五経之内に詩経と申物御座候。是はただ吾邦の和歌などの様な物にて。別に心身を治め候道理を説たる物にても。又国天下を治候道を説たる物にても無御座候。古の人のうきにつけうれしきにつけうめき出したる言の葉に候を。其中にて人情によく叶ひ言葉もよく。又其時その国の風俗をしらるべきを。聖人の集め置き人に教へ給ふにて候。是を学び候とて道理の便には成不申候へ共。言葉を巧にして人情をよくのべ候故。其力にて自然と心こなれ。道理もねれ。また道理の上ばかりにては見えがたき世の風儀国の風儀も心に移り。わが心をのづからに人情に行わたり。高き位より賤き人の事をもしり。男が女の心ゆきをもしり。又かしこきが愚なる人の心あはひをもしろるる益御座候。又詞の巧なる物なるゆへ。其事をいふとなしに自然と其心を人に会得さする益ありて。人を教へ諭し諷諫するに益多く候。殊に理窟より外に君子の風儀風俗といふ物のある事は是よりならでは会得なりがたく候。後世之詩文章は皆是を相述いたし。殊に時代近候故会得成安き筋多候故。右之心持にて学候へば其益多御座候。殊更吾邦にて学問をいたし候は。聖人と申候も唐人経書と申候も唐人言葉にて候故。文字をよく会得不仕候ては聖人之道は難得候。文字を会得仕候事は。古之人の書を作り候ときの心持に成不申候得ば済不申儀故。詩文章を作り不申候得ば会得難成事多御座候。経書計学候人は中々文

字のこなれ無御座候故。道理あらくこはくるしく御座候事にて候。

依是日本之学者には詩文章殊に肝要なる事にて御座候。

五經のうちの『詩經』を取り上げ、それを我が国の和歌のようなものであるとし、朱子学派が言うような「道理」や国天下を治める道を説いた物ではないとする。徂徠はむしろ、巧みな言葉で「人情」をよく述べているとして、朱子学派とは明らかに異なる『詩經』に対する見解を披瀝している。さらに、「君子の風儀風俗」を知るといふ点において『詩經』に勝るものはないとし、後世の詩文章の範であるとする。そして、それを学ぶにあたっては、「唐人言葉」（中国語）を会得し、古人の気持ちにならなければ、「聖人之道」も得難いとするところに古文辞学を提唱する徂徠の考え方が窺える。「聖人之道」の会得には、經学だけでは不十分で、人情も養わなければならない。徂徠は『詩經』こそ、その最良の教材であると述べている。

凡ソ聖人ノ道ハ、文字ニ書キノセタリ。文字ハ異国ノ詞ニテ、聖人ハ又上代ノ人也。シカモ其智広大ナルコトハ、天地ノ窮リナキガ如ク、凡人ノ及ブベキニ非ズ。カカルユヘニ、学問ノ道ハ俗語詩文章ヨリ学ビ入りテ、異国ノ人ノ詞ヲ知り、歴史ヲ学ビテ、代々ノ制度風俗ノ違ヲ知り、上代ノ書ヲ学ビテ、古今ノ詞ニ違アルコトヲ知り、六經ニ心ヲ潜メテ、聖人ノ教ニ熟スレバ、其詞其ワザニ習染ム間ニ、イツトナク吾心アワヒモ移リ行キ、智慧ノハタラキモヲノツカラニ聖人ノ道ニ違ハズナリテ、其後、今ノ世ノアリサマヲミレバ、天下国家ヲ治ムル道モ、掌ヲ指スガ如クニナルコ

トナリ。

徂徠は『學則』⁹⁾において、天下国家を治める聖人の道は、すでに文字として書き残されているとする。そのため、学問としては詩文章を入口とし、語学と歴史を学び、制度の違いを知り、六經に精通することで、知らず知らずのうちに聖人の道を会得することになるという。つまり、徂徠は文字の中にこそ学問があり、聖人の道もこれを学ぶことで会得されるとするのである。

こうした徂徠の考え方をうけて、周南は『為学初問』¹⁰⁾において、詩文無益論に対して次のように述べている。

理学好む人、武学好む人、詩文の学は無益なりとて誹る人あり。僻陋の見なり。古より猛将勇士歌を読み詩を作り、文雅の名伝はる人こそ多けれ。風雅の心なき人は、鄙野無骨にて、武徳も全からず。助けにこそ成るべけれ、何の害かあらん。又理学好む人の詩文誹るは、学問固陋にて、大道の旨に達せぬ故なり。「詩を学ばずして以て言ふことなし」と孔子曰し。古の詩と今の詩と、体こそかはれ、詩の徳は殊なる事なし。文雅の心なき人は、固陋偏僻にて、君子の域に入り難し。先づ詩を学び、それより文章を学び、文辞の道に通ずれば、六經古書もすめて、聖賢の道にも是より入ることなり。詩文何の害かあらん。専ら務むべき事なり。

一見して、徂徠の考えを祖述した内容であることが分かる。孔子の言を援用しながら、詩文の益について述べるとともに、「聖賢の道」の入口として詩文を学ぶ必要を説き、「専ら務むべき事」として積極

的に携わること提唱している。

また、詩文の領域における蔵書として注目されるのが、総集に分類される朝鮮通信使との詩文の応酬を収めた一連の唱和集である。とくに、正徳元年（一七一二）六代將軍徳川家宣の襲職を賀するために派遣された、第八次朝鮮通信使の来訪に際して、赤間関でこれを迎えた山県周南は、見事な詩文唱酬によつて李東郭ら使節一行をはじめ、対馬藩の雨森芳洲から激賞されている¹¹。周南は徂徠学の一翼を担う俊秀であつて、この詩文唱酬は江戸にいた師の徂徠にとつても、その学問の水準の高さが世に認められる契機となつた出来事であつた。「雞林唱和集」には、その際に唱酬された詩文が収められている¹²。

さらに、享保四年（一七一九）七代將軍吉宗の襲職による第九次朝鮮通信使の来訪に際しても、萩藩からは周南の弟子達が出迎えている。このことは、とくに徂徠学の詩文における水準の高さが藩内でも認められていたことの傍証となろう。その際の作品が収められた『桑韓唱和損篋集』（享保四）、『桑韓唱酬集』（同上）、『両関唱和集』（享保中）もまた、徂徠学の影響下にある作品集であると考えてよいだろう。

音楽の領域

〈管楽〉

『笙譜』『箏譜』『笛譜』『鳳笙譜』『蘆声譜』『鳳笙鞀鼓譜』『龍笛譜』
〈絃楽〉

『琵琶譜』『箏譜』『和琴譜』『頌琴譜』

〈打楽〉

『三鼓譜』『太鼓鉦鼓譜』

『御書目録』以降、こうした譜の蔵書は全く増えていないところを見ると、これらはみな明倫館創設期に周南によつて収集されたと考えられる。その理由の一つには、徂徠の礼楽重視が挙げられる。『弁道』¹³に、

鼓舞天下、養其徳以長之、莫善於楽。故礼楽之教、如天地之生成焉。君子以成其徳、小人以成其俗、天下由是平治。（天下を鼓舞し、其の徳を養ひて以て之を長ずるは、楽より善きは莫し。故に礼楽の教へは、天地の生成のごとし。君子は以て其の徳を成し、小人は以て其の俗を成し、天下是に由りて平治す。）

とあり、徂徠は「天下を鼓舞」し、「徳を養ひて以て之を長ずる」には、「楽」に及ぶものはないとしている。そして、君子が「徳」を成し、小人が「俗」を成すことで、天下は「平治」するとしているが、そのための重要な手段が「楽」なのである。

周南自身もそうした徂徠の影響を多分に受けており、何よりも江戸の護国塾時代に徂徠から直接笙・箏を学んでいる。『為学初問』において、周南は次のように音楽の意義を述べている。

理屈世界の見識にては、音楽は無用の長物とこそ思ふべけれ。争でか世を治め民を安んずるの具なることを知らん。人喜ばば歌ふ。

歌へば手を拍てはやし、草木糸竹の音を以て人声を助け音曲をかざる。自然の人情なり。譬へば禽鳥の春陽に感じて囀るがごとし。故に音曲は天地の和気なり。

「理屈世界の見識」とは朱子学のことを指し、「音楽」を「無用の長物」と見ることに異を唱えている。人間にとって自然な感情の発露である音楽こそは、「世を治め民を安んずるの具」であり、「天地の和気」であるとしている。続けて次のように言う。

凡そ歌舞は人の喜心の外に発するなり。是則ち天地の和気にして生育の徳なり。聖人の仁徳なり。故に楽記に「大人礼楽を挙げれば、則ち天地將に昭らかに為さんとす。天地訢合す。陰陽相得て、嫗覆育万物を煦め、然る後に草木茂り、区々として萌え達す」といへり。先王愷悌の徳、父母の心を以て万民を撫育し給ふは、春夏生育長養の徳なり。

「歌舞」とは、「天地の和気」、「生育の徳」であるとして、「聖人の仁徳」とまで断じている。さらに、

古は君子故無く、琴瑟身を離さずといへり。凡そ音曲は鬱滞を導引し、邪穢を蕩滌し、氣血を和順し、徳を養ふべき物なり。

とも見え、やはり音楽の効用を述べている。徂徠学において音楽は、「聖人の道」が具体化された「礼楽刑政」の一つとして重視される。

こうした徂徠学における音楽の重視はまた、周南を媒介として六代藩主毛利宗広にも感化を及ぼしていたようである。すでに五代藩主の吉元は、明倫館において釈菜を挙行するにあたり音楽を奏させていた。

しかし、その後次第に習得しようとする者が減り、楽器もただ館中の備品となっていた。吉元に次いで襲封した宗広は、奏楽が廢絶すれば先侯の旨意にそむくだけでなく、風俗の退廢をも憂慮したようである。そうした宗広の音楽重視は、滝鶴台の「周南先生行状」に次のように記されている。

侯好古楽。乃命先考、使学館諸生肄樂、春秋釈菜合樂、公宮間燕亦張軒輿。侯自鼓箏吹笙。於是糸竹之声、洋洋盈耳焉。(侯へ毛利宗広)古楽を好む。乃ち先考へ山県周南に命じ、学館の諸生をして樂を肄はしめ、春秋の釈菜樂を合し、公宮の間燕も亦軒輿を張らしむ。侯自ら箏を鼓し笙を吹く。是に於て糸竹の声、洋洋として耳に盈つ。

藩主が明倫館の諸生に対して、楽器の習得を命じたことが記されており、藩主自らが楽器を奏するほどであった。当時の明倫館の様子については、服部南郭の「周南先生墓碑」にも、「育英之效。日日益進。講誦習礼。弦歌之音不断」(育英の效、日日益々進む。講誦習礼、弦歌の音断えず。)と見える。さらに、『遺徳談林』下¹には、

宗広公音楽ノ事別テ御心ヲ被用、学館ニテ取建被仰付、器用ノ人柄京都被差登稽古被仰付、尚侯ニモ御取悩被遊ケル故、音楽繁昌シテ追々京都へモ被差登執行シケル故、明倫館其外ニモ音楽繁昌シケルト也。

と見え、藩主の肝煎りで楽器習得のために家臣を京都に派遣するほど、音楽が盛んだった様子が窺える。当時の朱子学派からすれば「無用の

長物」とされる音楽に対して、藩主自らがこれほどまでに力を注いでいるのである。そうした背景には、明倫館創設当初からの藩主による音楽への理解と、周南を媒介とする礼楽を重んじる徂徠学の受容などが相俟った結果とすることができるとであろう。

歴史の領域

〈総説〉

林恕『王代一覽』〔七卷〕

鵜飼信之『編年小史』〔七卷〕

『本朝往古沿革図説』

〈通史〉

林恕等『本朝通鑑』〔四〇巻前編三巻続編二二〇巻〕

林恕撰『国史実録』〔七八巻〕

徳川光圀『大日本史』〔二四三巻〕

長井定宗『本朝通紀』〔前編二五巻後編三〇巻〕

〈時代史〉

『古事記』〔三巻〕

本居宣長『古事記伝』〔四四巻〕

『日本書紀』〔三〇巻〕

『新日本紀』〔二八巻〕

谷川士清『日本書紀通證』〔三五巻〕

山本広足『神代巻講述鈔』〔五巻〕

菅野真道等『続日本紀』〔四〇巻〕

藤原冬嗣『日本後紀』〔二〇巻〕

鴨祐之『日本逸史』〔四〇巻〕

藤原良房等『続日本後紀』〔二〇巻〕

藤原基経等『文徳実録』〔二〇巻〕

菅原道真『類聚国史』〔二〇〇巻〕

『東鑑』〔五二巻〕

〈雑史〉

『扶桑見聞私記』〔七六巻〕

『前々太平記』〔二二巻〕

『前太平記』〔四〇巻〕

『後太平記』〔四二巻〕

『朝鮮征伐記』〔九巻〕

『列祖成績』〔二五巻〕

『玉露叢』

『智囊』

『陰徳太平記』〔八一巻〕

『西国太平記』〔一〇巻〕

『吉田物語』

〈史論〉

北畠親房『神皇正統記』〔六巻〕

新井君美『古史通』〔四卷〕

〈伝記〉

『日本人物志』〔七卷〕

藤井臧『国朝諫諍録』〔二卷〕

巨勢正純等『本朝儒宗伝』〔三卷〕

林靖『本朝遯史』〔二卷〕

黒澤弘忠編『本朝列女伝』〔二二卷〕

藤井臧『本朝孝子伝』〔三卷〕

『仮名本朝孝子伝』〔三卷〕

〈系譜〉

萬多親王等『新撰姓氏録』〔三卷〕

洞院公定『諸家大系図絵』

速水房常『知譜拙記』

〈史料〉

大館常興・大和宗恕『大和家蔵書』

丸山可澄『花押藪』〔七卷〕

瑞溪周鳳『善隣国宝記』〔三卷〕

松下見林『異称日本伝』〔三卷〕

徂徠は『学則』において、歴史を学ぶことで六経も明らかになるとしている。

今を知らんと欲する者は必ず古に通じ、古に通ぜんと欲する者は

必ず史なり。史は必ず志にして、しかるのち六経ますます明らかなり。六経明らかにして、聖人の道に古今なし。それ然るのち天下は得て治むべし。故に君子は必ず世を論ず。またただ物なり。しかし徂徠学の場合は、天下を治めるための聖人の道として、それが具体化された六経をより理解するために、歴史を学ぶことが必要だったというほうが、むしろ的を射ているであろう。『太平策』^⑤にも次のようにある。

人オヲ生ズルハ、学問ニ越ルコトナシ。学問ハ文字ヲ知ルヲ入路トシ、歴史ヲ学ブヲ作用トスベシ。・・・士君子ノ輩ハ、文字ヲ知ルヲ要トス。近年理学（朱子学）ハヤリテ、アシキコトヲ云チラシ、其習ハシ儒者ノ常語トナリテ、文字ヲ知ラズトモ、道理ヲ知レバヨキト云ハ、大ナル僻事ナリ。文字ヲ知ラネバ、道理モ暗キモノナリ。小者・中間ノイロハヲ知タルト知ラザルトハ、モノノ心得各別ナルモノナリ。是ニテ推知ルベキコトナリ。マシテ心法修行ナド云ヘルヤウナル、坊主ヲシキコトハ、大形ハ、ハヤラヌガヨキコトナリ。只歴代ノ事跡ヲシレバ、治国ノ道モ、軍旅ノ事モ、平生ノ行、忠臣義士ノ迹モ、皆其内ニアリ。

徂徠の態度は「文字ヲ知ルヲ要トス」として、端的にあらわれている。文字を正確に解釈できなければ、道理にも暗くなると述べている。そして、学問はまず文字を知り、次いで歴史を学ぶべきであるとする。ここでもやはり、国を治める上で必要な歴代の事跡は、文字の中にこそあるという徂徠の考えがあらわれている。徂徠にとっては、詩文を

通して文字に習熟することが、経書や歴史にも通じる階梯であるといふことはすでに触れた。その上で、『徂徠先生答問書』においては、歴史について「学問は歴史に極まり候事に候」と端的に断じている。

学問は歴史に極まり候事に候。古今和漢へ通じ不申候へば。此国今世の風俗之内より目を見出し居候事にて。誠に井の内の蛙に候。

徂徠の言う歴史とは、「和漢」に等しく重きが置かれるものだったと思われる。その具体的内容については、むしろ周南の『為学初問』にあらわれる。

堯舜禹礼楽を造り、人倫を明らかにし、治国の法を定め給ひしより、万世の規矩となりぬ。世に随ひて小変はあれども、堯舜の形を易ること能はず。是至極の道なるゆへなり。本朝には天智天武の帝淡海公父子当時の賢臣達、令を造り式を作り格式を作り、唐の礼義を移して、吾国の人倫の法を定め、治国のその道而建て給ふ。今に至りて其規範に循ふ。大経大法はいふにや及ぶべき。

宮室衣冠日用の諸物風俗言語に至るまで、悉く中華の式なり。漢土と吾国と異なりといへるは、小異を見て大同を知らざるなり。

国史を讀みて来由を究め、異国の史とつき合せて見ば、其実を知るべし。本朝中華朝鮮等は一氣の国なる故、堯舜の規矩に随へば能く治まり、其道に違へば必ず乱る。古今一徹なり。然るに昔は学問なしといへるは、室町の末戦国の余習を見ていへるなり。

そもそも、堯・舜・禹が礼楽を造り、人倫を明らかにし、治国の法を定め、「万世の規矩」とした。我が国においても、そうした「唐の

礼義」を移入することで人倫の法を定め、治国の規範としてきた。しかも、「諸物」「風俗」「言語」に至るまで、そのほとんどが「中華の式」である。周南は「本朝」「中華」「朝鮮」は「一氣の国」であるとし、「堯舜の規矩」にしたがうことで、天下もよく治まると述べている。それぞれの国が、「一氣の国」であるという繋がりを重んじてこゝとで、聖人の造った礼楽を現在までも規範の拠り所と考えているのは、明らかに徂徠学の影響である。こうした歴史認識が、徂徠学の主張を支える理論の根拠でもあった。そのため、「国史を讀みて来由を究め、異国の史とつき合せて見ば、其実を知るべし」という周南の言葉は、さきの『徂徠先生答問書』における「古今和漢へ通じ不申候へば。此国今世の風俗之内より目を見出し居候事にて。誠に井の内の蛙に候」と呼応するものであると言えよう。

実際に、周南は徂徠の影響を多分に受け、歴史に対する造詣も深かった。滝鶴台による「周南先生行状」では、

其学一遵徂徠先生教、以経術文章為宗。文則秦漢、詩則唐明為歸。而博綜強記、無所不窺。最精国史。治乱興衰之跡、至皇朝文物典故、諸家譜第閥閥、明如措掌。嘗奉命、与永田政純共選公室譜牒、諸臣家譜。(其の学、一に徂徠先生の教へに遵ひ、経術文章を以て宗と為す。文は則ち秦漢、詩は則ち唐明を歸と為す。而して博綜強記、窺はざる所無し。最も国史に精し。治乱興衰の跡より、皇朝の文物典故、諸家の譜第閥閥に至るまで、明らかなること掌を措くがごとし。嘗て命を奉じ、永田政純と共に公室の譜牒、諸

臣の家譜を選す。」

として、「治乱興衰の跡」から「皇朝の文物典故」、さらに「諸家の譜第閩」に至るまで「最も国史に精し」という評価を受けている。さらに藩の修史事業にも関わり、永田政純を中心とした『萩藩閩閩録』の編述や『江氏家譜』を監修している¹⁶⁾。

歴史の領域における蔵書の多さもまた、徂徠学の影響と周南自身の歴史への造詣の深さが、大きく与っていたことを指摘できるのである。

四、まとめ

本稿における旧蔵国書の検討からは、大きく次の三点を指摘できる。まず、荻生徂徠及び徂徠門下の著作の多さから、重建以前の明倫館教育に徂徠学の色濃い反映が見られることである。そして、享保年間以降、徂徠学批判の書は多数存在するにも関わらず、明倫館の蔵書の中にはほとんど見られないことから、そこに意図的な収集姿勢があったことは明らかである。

次に、徂徠学への傾倒と相俟って反朱子学を標榜する著作の多さである。たとえば、荻生徂徠が、「蓋し百年來の儒者の巨擘は、人材なれば則ち蕃山、学問なれば則ち仁斎、余子碌々として未だ数ふるに足らず」¹⁷⁾と述べる、陽明学の熊沢蕃山、古学の伊藤仁斎などの著作がそれである。とりわけ、仁斎の著作は、その子東涯のものとおわせて多く収められている。これには、周南による仁斎への親炙も理由とし

て挙げられる¹⁸⁾。

そして第三に、明倫館創設期における学統・学派の未分化である。従来、明倫館は周南の第二代学頭就任によって、朱子学から徂徠学へ転換したとされてきた¹⁹⁾。しかし実際には、朱子学を標榜する初代学頭小倉尚斎の下でも、周南の主導により徂徠学関係の書籍が着々と収集されていたことを窺わせる。収集傾向に見られる、詩文、音楽、歴史の重視などは、すでに触れてきたように徂徠学の影響を多分にうけたものと考えられる。明倫館を創設した五代藩主毛利吉元と小倉尚斎は、いずれも林大学頭信篤に学んで朱子学を尊重していたが、吉元は音楽を重んじる一面を有していたし、尚斎も正徳元年に江戸で朝鮮通信使を迎え、李東郭らと詩文を唱和している。そして東郭は尚斎を、「日東の諸士総じて文を能くす。大手騷壇独り君を許さん」と賞した²⁰⁾。それによって名声が高まった尚斎を、將軍家宣は招聘しようとしたが、疾病を理由に固辞している。また『唐詩趣』（八冊）を著し、徂徠門下の俊秀である安藤東野も詩文の交わりを請うなど²¹⁾、尚斎は詩文に造詣が深かった。

こうした状況も勘案すれば、創設期の明倫館が朱子学を標榜しながらも、実際には徂徠学に近い側面も有していたことは否定できないことである。つまり、朱子学から徂徠学への転換は、百八十度の大転換だったのではなく、明倫館においては創設当初から学統・学派については、多分に未分化の状態があったものと考えられる。

蔵書の利用方法については、徂徠『政談』に見られる次の言説が示

峻的である。

総シテ御蔵ノ御書物ハ、儒者共ニ望次第二御借可有事也。書籍ハ外ノ物ト替リ、兼テ見置カズシテハ、急ニ用ニ立ヌ物也。御庫ニ聚メ置レテモ、見ル人無レバ、反古ヲ詰置タルモ同前也。虫ニ食セテ捨ンハ惜キ事甚シ。外ノ物ハ、武具ニテモ、皆取出シテ用レバ、早速ニ用立トモ、書物ハ夫トハ違フ事也。

蔵書については、望む者があれば好きなように貸し出すべきだとする徂徠の考えは、周南を媒介として明倫館教育にも影響を与えている。それは、享保五年（一七二〇）十月に、当役山内広通と当職益田就高の名で出された「条々」²²に窺える。ここに、書籍の管理について次のようにある。

書籍請之儀は、本締役之可為沙汰候。然共書籍差引之儀は、学頭之可為了簡候間、諸生中より取揃之役兩人被申付、何分学頭之差図を請、書籍不違紛失混雜様可有沙汰候。且又諸生之外たりとも、書籍借用之願於有之は、度々学頭承届、学館当用に無之書物之分は月切にして可貸渡候。大部之書十卷充可貸渡候。尤借用之面々、物切不及遅滞致返弁候様、帳面印形を以可致沙汰之旨、可被申付候。且又毎年蟲干入念被申付其節は学頭本締役立合、部数冊数共改可被申付事。

学頭と本締役の管理の下で書籍の貸し出しを許可するが、諸生以外の書籍の貸し出しも認めるなど、明倫館での書籍の扱いに徂徠の影響が見られることは明らかである。

明倫館の創設当初、儒者として諸生に講説を行っていた周南が、どのように書籍、とりわけ国書を用いていたかは明らかではない。ただ、明倫館の命名を担当した際、そこに徂徠の教育思想を仮託し²³、さらに創設当初から徂徠学を重視した国書の収集を行っていることなどからは、漢籍をテキストとして用い、その理解の助けに副読本として国書を用いたことも推察される。そうであれば、朱子学のテキストを批判的に読むために、徂徠や徂徠学関係の国書を用いて学んだということもあつたものと思われる。

滝鶴台の「周南先生行状」によれば、周南が萩藩にもたらしたものは、藩内の子弟に対する多大なる教化と、文学の土壌であるとしている。

六芸及鈴韜劍槍諸科、各立其師、使国中子弟日日遊処焉。春秋釈菜、侯自臨行養老乞言之礼。於是風化大行。文学之隆、媲美両都。蓋先考之力居多云。（六芸及び鈴韜劍槍諸科、各々其の師を立て、国中の子弟をして日日遊処せしむ。春秋釈菜、侯自ら臨みて養老乞言の礼を行ふ。是に於て風化大に行はる。文学の隆なること、両都を媲美す。蓋し先考の力居ること多しと云ふ。）

周南による明倫館創設当初からの国書の収集には、徂徠学の教育思想が反映している。それは同時に、徂徠学を重んじる教学の基礎を形成するための尽力であつたとも言えるのである。

注

- (1) 山口大学人文学部漢籍調査班（一九九二）
- (2) 河村一郎『長州藩徂徠学』（私家版、一九九〇）
- (3) 『周南先生文集』（山口県立山口図書館蔵）
- (4) 同右
- (5) 日本思想大系『荻生徂徠』（岩波書店、一九七七）
- (6) 分類に際しては、笠井助治『近世藩校における学統・学派の研究』（吉川弘文館、一九六九）に拠った。その上で、陽明学派、古学派などはその学問の性格上、「反朱子学」に分類した。また、折衷学派で明らかに徂徠の影響が認められるものは、「徂徠門下および影響関係」として分類した。ただし、たとえば折衷学派の細井平洲は、徂徠に影響を受けながら、一方で徂徠学を批判する書もある。そうした場合は、著書の内容によって分類した。
- (7) 小島康敬『徂徠学と反徂徠学』（ぺりかん社、一九八七）
- (8) 『荻生徂徠全集二』（みすず書房、一九七三）
- (9) 注（5）掲『荻生徂徠』
- (10) 『日本倫理彙編』（育成会、一九〇二）
- (11) 前出「周南先生墓碑」、「周南先生行状」に記述がある。
- (12) 信原修「正徳辛卯信使の来日と詩文唱酬の実態——山県周南・当壮菴一族を中心に——」（『朝鮮学報』第百六十二輯、朝鮮学会、一九九七）
- (13) 注（5）掲『荻生徂徠』
- (14) 『毛利十一代史』（名著出版、一九七二）
- (15) 注（5）掲『荻生徂徠』
- (16) 同様の記述は「周南先生墓碑」にも次のようにある。「先生兼精国史譜学。吾邦典故。諸家閥閥。皆能明弁。嘗奉侯命。選公室譜牒諸臣系譜。」（先生兼て国史譜学に精し。吾邦の典故、諸家の閥閥、皆能く明弁す。嘗て侯命を奉じ、公室の譜牒、諸臣の系譜を選す。）
- (17) 原念斎『先哲叢談』（平凡社東洋文庫、一九九四）
- (18) 前掲河村一郎『長州藩徂徠学』
- (19) 『山口県教育史』（山口県教育会、一九八六）は、山県周南が第二代学頭に就任したことを機に「以後明倫館での学派は周南の古文辞学が主流」になったとしている。
- (20) 「小倉尚斎墓碑」（近藤清石『霸城明倫館学頭次第』、私家版、一九一一）
- (21) 『東野遺稿』（影印本『詩集日本漢詩』、汲古書院、一九八九）の小倉尚斎宛書簡に見える。
- (22) 「明倫館御書付類控」（山口県文書館蔵）
- (23) 拙稿「萩藩校明倫館の命名について——荻生徂徠の教育思想の反映——」（『新しい漢字漢文教育』第四一号、全国漢文教育学会、二〇〇五）